教師を育てた
言葉たち

No. 023

高松第一高校(香川県高松市立)

片山浩司 先生

かたやま・こうじ

◎教職歴30年。同校に赴任して31年目。教頭。担当教科は理科。中四国の高校教師有志による進路指導の勉強会の香川県の世話人を務め、教育力向上を目指した現場の教師による主体的な連携をサポートしている。

本校は、県内唯一の市立高校であり、今年で創立92年を迎える県下有数の進学校です。今年度からは、県立学校との人事異動の一体化が図られるようになりましたが、長い間、本校は転勤が少なく、意識的に情報収集をしないと外部からの情報が入りにくい状況でした。

私が進路指導部の副部長となった約20年前は、生徒の希望進路を実現するため、進路指導の充実に注力していました。というのも、生徒一人ひとりの進路目標を踏まえた学習習慣の確立や小論文指導の校内体制づくり、さらには3年生の3月まで生徒の挑戦を支え続けるための保護者の意識改革など、当時は様々な課題を抱えていたからです。ただ、いずれの課題も、すぐに成果が出るような簡単なものではありませんでした。にもかかわらず、私たちは、同じ顔触れの仲間と限られた情報の中で考え、もがいていたように思います。自分たちの力で何とかしようとすることはもちろんよいことですが、なかなかアイデアが出ず、期待するように物事が前進しないことにもどかしさを感じることもありました。

そうした状況の中、当時の進路指導部長が私たちに呼びかけ、進路指導部内の合言葉となったのが「**常に様々な方向にアンテナを張っておこう**」でした。それまでは部活動に力を入れていて、週末も高松から離れることが少なかった私も、近県の学校を訪問したり、勉強会に参加したりするようになり、多くの学校が同じような悩みを抱えながらも、様々なアイデアでそれを乗り越えていることを知りました。学校視察の際は、できるだけ複数人で訪問し、同じものを見聞きしても、異なる視点で自校への取り入れ方を考えるようにしました。進路指導部のメンバーと自動車に同乗して訪問先に向かうことがよくありましたが、帰りの車内ではいつも、その日学んだことを自校にどう生かすかを議論していました。外部からヒントを得ながら、仲間たちと一緒に考えを深めていたのだと思います。

全国の学校を訪問する中で、校内の仲間との情報交換だけでは思いつかないような視点からのアイデアや刺激が多く得られ、それらを様々な取り組みにつなげていきましたが、それ以上の財産となったのが、師と呼べる先生や、何でも相談できる仲間が校外にもできたことです。「他校から学んですぐに実践してみるのはよいことだけれど、それが自校の生徒に本当に適した活動なのか、もっと精緻に検証する仕組みも考えるべきでは」と、私に率直に苦言を呈してくださる先生にも出会えました。

最近の若手の先生方は、とても優秀ですが、かつての私のように、自分の力だけで何とかしようという気持ちが強いと感じることがあります。10年前から私が中四国の高校教師の学びの場づくりにかかわっているのは、若手の先生方にも、校外の仲間とつながることを経験してほしいという思いからです。進路指導とは、生徒の視野と可能性を広げた上で、生徒が本当に望む進路を選択させ、それをかなえることです。その実現のためにも、教師はもっといろいろな人と出会って、自らの視野を広げてほしいと思います。

高松第一高校（香川県高松市立） 全日制／普通科、音楽科／共学／1学年約300人／2020年度入試合格実績（現浪計）国公立大は、横浜国立大、名古屋大、大阪大、九州大などに210人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大などに延べ624人が合格。